

く足かけ2世紀連続エッセイ

毎日がパラダイス 吉村達也

第10回 詰将棋新時代への突入

お寒うございます。いえ、天気のことではありません。景気のことでもありません。天気も景気も寒いには違いありませんが、もつと寒いのが詰将棋の将来です。

おまえなあ、500号記念のときといい、この新年号といい、めでたいときに「おめでとうございます」のひとつぐらい言えないのか、と怒られそうですが。しかし……お寒うございませう、ハイ。

ある日詰バラ編集部に届いた一通のぶあつい郵便物から悲劇が始まるという仮想小説を記念号に書きましたが、その私のところに、十一月のある日、ぶあつい郵便物が届きました。裏を返

■詰将棋はすでにモルモットの存在になつてゐる
といつても、野下先生はみなさんごぞんじ、とくに詰バラ会員で、詰将棋にも深い理解と愛情を持つておられるはずと信じておりますが、しかし

その研究内容は驚愕の一語。それが、前号に門脇芳雄さんが紹介されたのをごらんのとおり、なんと金銀3×3図式の完全発掘。この趣向の新作をみつけるべく日夜自分の頭で努力していた珍型作家のみなさん、はいおつかれさまでした！

ついでに申し上げますと、もう一カ所に貼つてあつた付箋のところを広げてみると、こんどはNTTコミュニティション科学研究所の小山謙二氏による「裸玉詰め将棋問題の体系的評価」。作家の目から鑑定するに、バラ会員の

野下さんは「詰将棋」という文字づかいであるのに対して、小山さんという方は「詰め将棋」と「め」が入つて

してみると、差出人は「詰将棋パラダイス水上仁」。あの小説を地で行く展開に、いったい何事かと中を開けてみますと、出てきたのが二百ページを越す一冊の報告書。題名は「ゲーム・ブ

ログラミング・ワークシヨップ97」。主催者名「コンピュータ将棋協会」。中には二カ所付箋が貼つてありましたが、そこを開いてポーズン！

ひとつの報告文書の題名は「詰将棋の金銀図式の数え上げ」。報告者、電気通信大学情報工学科野下浩平・飯田義仁。

で、で、でた……でした。陣内竜堂の本物が！まさかこんなに早く書いたことが現実になるうとは。

いる。むむつ、これはマニア筋ではない人種だな、と推理したのは間違っていますかね。

ま、それはともかく、小山さんのおやりになったことは、玉を1八・1九・2九にそれぞれ置いたときに成立する全裸玉のあぶり出し。この作業により、過去たつた一作しか「作られて」いなかった1八玉型の裸玉がもう一作見つかったりしましたが、いきなり検討結果のリストがずらずら並んでいるのを見ると、たまりませんね。

なにしろ最小持駒という条件で考えられるかぎりの組み合わせをぜんぶ検討して、おまけに余詰順まで提示してあるんですから。たとえば1八玉で持駒飛2銀3桂4香4歩18(一)のときは、13飛、29玉、59飛、39金合、18銀以下、三十五手詰とありますが、こんな持駒の取り合わせ、ふつう人間だったら考えないですよえ。

あるいは持駒が飛2銀4香1のとき

は、13飛、27玉、28銀、同玉、18飛打以下五十一手詰で角あまりですつて。香1なんて、私もコンピュータ系の表記になつちやいましたよ。ちなみに原文では、右の手順の三手目のところから28銀打・28玉なんて書き方になって

いるところが、詰将棋ファンをちょっぴり悲しくさせてしまいます。詰将棋のことやるんだつたら、やはりギョーカイのしきたりに倣ってくれなくちゃ。それにしてもですよ、裸玉はともかくとして、金銀石垣図式を見つけた喜びを、野下さんの研究によつて私たちは一瞬のうちに奪われてしまったのは、けっこうショックな出来事でした。二十数個の未発見作を、あつというまに「みーつけ」とばかりにとりあげられてしまったわけですからねえ。

と云つて、べつに抗議しているわけじゃないので悪く思わないで下さいね、野下先生。これも詰将棋の宿命と覚悟していましたから。

とはいえ、前号の門脇さんの「これにて一件落着」はまさに名セリフでしたが、お白州に集まった詰バラ長屋の住人どもは、一件落着と言われても、「へへーっ」とひれ伏すことすら忘れて、目がテンになって声も出ない、という状況ではないでしょうか。コンピュータなる機械がすべての組み合わせを見つけたゆえ、以後、金銀石垣物の研究はすべて無駄にて候、と御沙汰があつてもねえ。

こうなりますと、この電通大の先生が次にまた新たな趣向シリーズをターゲットにされると、またしても「一件落着」の声とともに、長屋の八つあん熊さんのお楽しみが取り上げられてしまふことになりませぬ。

めでたい500号記念で私が書いた仮想小説は、決して被害妄想とか取り越し苦労のたぐいでなかったことが、早くも現実が証明してくれることになりました。少なくとも、初形が簡素な

盤面趣向系の短中編に関しては、今後続々とこういう事態が起きてくることでしょう。

創作ジャンルがコンピュータによって狭められていくのもつらいことですが、いちばん怖いのは、コンピュータによる趣向図式の発掘が続々となされることにより、「創作」という概念が「発掘」という概念に取って代わられないか、という点です。

森田銀杏さんの名コラム「詰将棋ものしり帖」のまねをさせていただきますと、

「おじいちゃん、昔は人間が自分の頭で詰将棋を見つけていた時代もあったんだね」

「そうだよ、将ちゃん。コンピュータなんて便利なものがなかったときは、みんな自分で変化や紛れを調べながら、完全作を見つけていかなければならなかったんだよ」

「それじゃ、裸玉の完全作はいくつあ

るかも知らないで、ダメな組み合わせだとわかんないで、一生懸命検討していたりしたの？」

「うん。そういつたいつ果てるつもりもない地道な作業を積み重ねて、一人でいくつもの裸玉を見つけた小沢正広さんや新田道雄さんという、とつても努力家の偉人さんが詰将棋の世界にはいたんだね。青ノ洞門をノミ一本で掘り抜いた僧禅海にたとえてもいいほどの偉業だよ」

「ふうん、でもその人たち、人生ムダにしちゃったね」

「ありやりや」

つてな感じで、未来の子供たちは詰将棋とは創るものではなく、見つけるものだと思ひ込み、我々の世代が、まさしく時間を費やし、人生を削ってやってきたクリエイティブな作業を、あつさりとして「時間のムダだったね」の一言で済ませてくれるかもしれせん。

■コンピュータは詰将棋界の黒船だ

なんともはや、詰キストにとってはやりきれない時代になりましたが、この潮流に目を背けたり、コンピュータの能力を過小評価したところで、それは現実逃避にしかありません。

昨年一年ではつきりしたことは、コンピュータの存在は、詰将棋界のみならず将棋界ぜんたいに向けて「門戸を開け」と押し寄せてきたアメリカからの外圧です。黒船です。もはや将棋界のみがコンピュータの影響から逃れる手だてはありません。

コンピュータの頭脳の活躍ぶりを視覚的にとらえるひとつの方法をご紹介します。ここだけコンピュータ用語が飛び交いますがお許しください。もしもあなたがWINDOWS95マシンをお持ちで、システムエージェンツによる自動デフラグを短いインタバルに設定していない方なら、ちよつとこれを試してみてください。タスクバ

1のスタートボタンからプログラムを開き、アクセサリ、システムツール、デフラグと順に選択して、デフラグを左クリックすると、「ドライブの選択」というウインドウが現われますから、最適化するドライブ（たとえばC）を選んでOKボタンを左クリック。

そこで出た「ディスクの最適化」ウインドウの指示に従ってディスクの最適化を始めます。ちなみにこれは、ファイルの削除などを繰り返して穴ボコだらけになった（断片化した）ディスクを平滑にして、ファイルへのアクセス速度をあげるための作業だと思っただけであれば間違いありません。ですから、もしも断片化の必要がなければその旨が表示されますので、以下の場面を見ることはできませんが……。

さて、最適化作業が始まったときに右端に出てくる「詳細を表示（D）」をクリックしてみてください。そこには驚くべき絵柄が展開します。一言で

いつてしまえば、コンピュータの頭脳がすさまじい速度で物事を処理していくありさまが、クラスタ単位のカラーな積み木模様となって画面いっぱい踊るさまが眺められるのです。いったいコンピュータが何をやっているのかは「記号の意味（L）」をクリックすればちゃんとわかるようになっていきます。この画面を眺めていますよ、もう絶対かなわないな、と思いますよ。コンピュータには逆立ちしたって勝てない、と。

指将棋においてコンピュータが勝つか人間が勝つかという議論は、もはや意味をなさない時代になりました。なぜなら、思考速度は勝負の比較にならないし、思考プログラムにしても、人間の精進には物理的限界がありますが、コンピュータの進歩には、とりあえずまだ壁はない。したがって、こういう状況では一時的に人間が（つまりプロ棋士が）勝つても、ほらみろ人間様は

やっばりすごいだろと単純に喜べる状況ではないのです。

ここでひとつ重要な意見を述べさせていただきます。それは、仮に今後「優れた指将棋プログラムができましたので一度お手合わせ願いたい」という申し出があっても、日本将棋連盟は、所属の棋士を絶対にコンピュータと戦わせてはならない、ということですよ。

なぜか。その理由はこうです。コンピュータが戦っている相手は、じつは目の前の人間ではなくて、将棋そのものなのです。もしもコンピュータがトップクラスの棋士に対して連戦連勝という状況になれば、それは棋士に勝ったのではなく、コンピュータが将棋というゲームそのものを制圧したということです。ところが、世間はそうはとらえない。棋士の能力に落胆する。そしてそれは、将棋界そのものに対する失望につながってゆく。

私に言わせれば「すでに泥沼の戦い

にはまり込んだ」チェスの状況をみれば一目瞭然です。なんだかんだいって、負ければチャンピオン本人のイメージが損なわれます。そして負けた、負けたの報道が先行します。

チェスの二の舞を踏まないよう、将棋棋士は、あくまで人間の最高峰を求めて戦ってくればいいと私は思います。そこにコンピュータとの競争をいれたら、その瞬間、確実に将棋界は崩壊への道を踏み出します。

おそらく最初は勝つでしょう。しかし、谷川・羽生時代にはコンピュータに勝っても、次世代の竜王・名人が負けたらどうなりますか。いまなら勝つそうだからと、いったん棋界の第一人者とコンピュータの対決イベントを始めたら、人間が不利になったからといって途中で逃げ出すわけにはいかないんですよ。コンピュータの進歩のすさまじさを考えたら、いま勝つということは、確実に未来の敗者を作ることを

意味します。

ですからコンピュータの挑戦をどうしても受けざるをでなくなった場合は、人間側代表にはヤクルトの古田さんと、渡辺徹さんとか、そういうアマチュア有名人に対戦してもらえばいいんです。それならイベントそのものも盛り上がりそうです。とにかく棋界の至宝をコンピュータの前に座らせては絶対にいけない。

■ こういう時期だからこそ詰将棋論議が重要になってくる

500号から始まった私の主張の展開は、やたら危機感をあおりすぎていと受け止めておられる方も少なくないとは承知しています。けれども、私が四十五年間生きてきて修得した人生哲学のひとつに「まだ大丈夫はもう危ない」というのがあります。

これはニッポン放送の編成部で働いていたときに得た教訓で、すなわち、

この番組は若干パワーが落ちてきた気もするけど、まだ大丈夫だろうな、と思ったときには、じつはもう番組の寿命が尽きているときなのだ、だから、物事は「まだ大丈夫」と思っているうちにどんどん改善していかなければならない、というものです。

そしていま、詰将棋界の置かれている状況というのは、まさに「まだ大丈夫」と希望的楽観論に支えられている状況だと思います。しかし、だからこそ、いま打てるべき手を打っておかないと、これまでのようになごやかに趣味の詰将棋の創作と解答を楽しむというやり方が崩壊したときに、茫然自失で立ち往生をしかねません。ひいてはこれは詰バラの存続にも関わってくる問題だと思えます。

では、打てるべき手とは何か。

まず第一は、パソコン時代の到来をみんなが受け入れる心理的下地を作っておくことですね。その点で言えば、

ここ数号のバラでは、エッセイやお便りを寄せてくる会員の半分以上がなんらかの形でコンピュータのことに触れるようになってきて、まさしくその動きが顕著が出てきた気がします。

そんな状況はたまらん、と感じられる方も多いでしょうが、「はい、明日からは飛角図式を作ってもムダです」と突然宣告される日がきたときに、そのつらい事実を容認できる心の下準備を、会員みんなでいまのうちから準備しておく必要があります。だってもう金銀石垣図式や裸玉が現にそうなつてしまつたのですから。これは百の子測を述べるよりも厳しい現実です。

そして第二に、詰将棋の魅力とか、創作の姿勢とか、そういったものについての議論をいまいちど盛り上げることで、バラ会員の意識を高めることが望まれます。

なぜかといえは、さきほども申し上げましたように、今後詰将棋界に加入し

てくる新人たちは、コンピュータの助力を当然の前提とした「発掘派」が主力になってくるのが予想されます。

そういう彼らにイージーな創作姿勢で詰将界をかき回されないためにも、我々旧来の「創造派」が、しっかりとした創造精神を固めておかなければならぬということなのです。

マニユアルモードの創造の大切さを軽視しがちな発掘派は、おそらくこまやかな作図センスに欠けるでしょう。しかし、オリジナルメンバートいようなべき創造派が、安易な創作精神に浸っていたのでは、詰バラの中身だつてポロポロになっていきかねません。

前号で私が第二テーマとして、やさしい詰将棋は入選しないのか、という問題を切り出したのも、「やさしい」という概念をここでしっかりと固めておかないと、「やさしい佳作」を排斥したり、逆に「ただの駄作」を初心向けに絶好との理由で迎え入れたりする非

常にアンバランスな状況が出かねないと思つたからです。

■テーマ図を入選させるか否かについて、詰バラ担当陣の評価はこうださて、前号にサンプルとして揚げた九手詰をもういちど見てください。

〈12月号の図3〉

6	5	4	3	2	1
				龍	
		龍		王	
				銀	

持駒 角

もしもあなたが詰バラの中学校の担当者だつた場合、この作品を採用しすか、という質問について、須藤大輔・吉田芳浩・八尋久晴・周藤裕也というバラの短編部門の担当者各氏と水上仁編集長という豪華メンバから回答が届きました。また、この方たちに出

した質問はそれだけではありません。

「あなたは投稿者が自作を『客寄せ作品』とコメントすることをどう思いますか」「あなたにとって入選とは何でしょうか」「入選回数 of 価値をどう思いますか」という、バラ投稿の常連には興味津々のテーマをおつけ、そちらのほうの解答もいただいています。まずは作意から紹介しましょう。

◎35角、24桂合、同角、同歩、25桂、同歩、24銀、14玉、23龍まで九手詰。
※初手31角は22桂合なら詰むが、角合として、以下同角、同飛となり、この飛車が龍のタテ利きを塞いで、次に35角と打ち直しても不詰。逆に作意で二手目角合だと同角、同歩、同銀、14玉、36角、25合、23龍まで同手数駒余り。

さて、これを私の作品だと思わずに、あなたが作ったつもりになって読んでください。作者であるあなたは、この図を詰バラの中学校に投稿してみようと考えました。ただし、手順がやさし

すぎるので果たして採用してもらえないか不安になり、投稿図面の脇についてこんなふうに書き添えてしまうのです。「やさしい作ですが42飛一枚で紛れと限定打を成立させているところを買ってもらえれば……。客寄せにいかがでしょうか」

どうです？　こう書きたくなる心理、あなたにも理解できるでしょう。では、こういう設定で投稿がきたとき、詰バラが誇る短編部門の豪華担当陣と編集長は、①採用についてどのような判断を下すでしょうか。②そして「客寄せにいかが」というコメントについて、どういう印象を持つでしょうか。

今月号は、まずはその二点について、各担当者の解答を見ていきましょう。(敬称略・順不同・スペースの関係で内容の一部省略もあり。文中ゴシック体は吉村による)。

八尋久晴―①好形作に加え、やさしいながらも桂合限定もあり、個人的には

好みの作品です。まさしく客寄せ作品としてなら入選可。ただし、他作品との難易のバランスなど難しい問題も。

②私自身、自作を客寄せと称して投稿しています。客を寄せることは大切なことと考えていますので(自作に自信がないのも事実ですが)。楽しめる作品、楽しんで作った作品、それだけでもよいのではないのでしょうか。

須藤大輔―①中学校なら入選不可。うまくまとめてあるが既成手筋の組み合わせで新味がないという反応が予想され、作者とともに選題者もちょっとやるせないことになってしまふ。詰バラの場合「一筋縄ではいかない」要素が必要だと思う。作者の立場なら幼稚園を希望する。②「平均点2点が取れるかな、どうかな。でも手順が気に入っちゃってるんだよね」といったとき、客寄せ作品という言葉をはくは投稿用紙につける。選題の際には無視し、一解答者として評価を定める。

吉田芳浩―①入選とどうかは採用される側のステータスORプライドの問題だと思えます。期末でなければ、一作までならこのレベルの作品を採用します（新人に限るかも）。期末なら、「幼稚園へ転送」。②客寄せという表現は採用側の概念と思えます。なお、詰工房メンバーの解答強豪氏は「詰将棋に興味を持ってもらう等の目的での選題は問題なし」。元担当氏は「名前を冠しての入選に値する内容なし」。周藤裕也―①新人なら採用の可能性あり。作意自体は入選に足りないが、これ以上ないと思われる簡潔な表現に将来性・潜在能力を感じますので、作者の創作意欲向上のためにも採用の可能性は否定できません。②作者コメントは解説には影響を及ぼすものの、選題に関してはあまり影響ないです。客寄せといわれても「そうですか」程度です。読者の大多数が作る側ではなく解く側であることを考えれば、客寄せ作

品は必要と考えます。私自身も、あくまで担当の判断としての客寄せ作をなるべく月一作採るようにしています。水上仁―①好みの作品です。配置にまったくムダがなく、紛れもあります。本作のように機能美追及型こそ望ましく、やたら難解（というより煩雑）志向の傾向は個人的には好ましくありません。採否については有名作家以外ならもちろん採用です。吉村達也作なら不採用です（あえて…）②好ましくないのですね。これは客先に土産を持参するときに「つまらないものですが」と言うようなもので、それより作品のウリをもっとアピールするコメントを書くべきです。客寄せは必要ですが、それは選ぶ側が判断することと思います。

いう概念も人それぞれです。しかし、ここでまず重要な点に注目していただきたいのは、採用説にしても不採用説にしても、単純に作意のやさしさを議論しているのではない、というところですね。そうではなく、作品の完成度の質とか、作者の詰将棋での位置づけとか、解答者側にもたらすもの、などがまずポイントになっている。私が「やさしい詰将棋はなぜ入選しないのか」というテーマを投げかけた狙いもそこで、やさしい作品であっても「駄作」でなければ、一方的に拒否されず、採用不採用の意見が分かれる余地がまだ残されている、という点を確かめたかったからです。では、やさしい作と駄作の境界線はどこにあるのか。その答えが吉田さんのコメント太字部分にあります。作者のステータスORプライドーまさにポイントはこちらです。次号は詰作家のホッペに鋭く迫る8ページ特集です。